

## 第六節 越前國主（一乘城主）

### 第一項 越前國主

朝倉敏景は越前國主としては初代であるが、夫れ以前及び朝倉氏滅亡後の越前國主は何人であつたか？斯かる質問をする人が澤山ある。そこで試みに調査して見ると、中々人數が多い。茲にその氏名を記して参考に供しやう。

#### 越前國主表

阿部引田比綱夫	高志村君	多治比廣成	大伴邑治麻呂	佐味蟲麻呂
藤原良繼	大伴駿河麻呂	栗田奈勢麻呂	佐伯美濃麻呂	藤原薩雄
阿部廣人	藤原辛加知	藤原繼繩	藤原百川	藤原宅美
大伴伯麻呂	藤原鷹取	五百枝王	坂上刈田麻呂	藤原内麻呂
壹志濃王	藤原乙徹	藤原葛野麻呂	三島名繼	藤原今川

(桂田長俊)	宮田長繁	(下間頼照)	柴田勝家	丹羽長秀
丹羽長重	堀秀政	堀秀治	青木一矩	徳川秀康
松平忠直	松平忠昌	松平光通	松平昌親	松平綱昌
松平吉品	松平吉邦	松平宗昌	松平宗矩	松平重昌
松平重富	松平治好	松平齊承	松平齊善	松平慶永
松平茂昭				

## 第二項 敏景

### 一 略傳

朝倉敏景、幼名は小太郎、孝景又は政景、孫右衛門尉、彈正左衛門尉と稱す。黒丸城主六代朝倉家景の嫡男で、大野犬山城主初代朝倉經景金崎城主初代朝倉景冬等は、皆その弟である。敏景は正長元年四月十九日を以て生れた。幼より才智聰を抜き、弓馬、書畫、各々其の奥儀を極め、夜は學者をして儒佛の道を講説せしめたといふから、國人も自然文武に精勤したことは勿論である。

時に主人斯波義健の嫡男千世徳丸早世す。因りて大野持種の子義敏を受けて嗣子とした所、家老の織田正忠、増澤甲斐守、二宮左近將監、同弟駿河守、千福中務少輔等は各自の權勢を張る爲め、義敏を嫌ひ、遂に將軍足利義政に訴へて之を放逐し、澁川義記の男義廉を以て千世徳丸の家督を相續せしめた。後ち義敏は伊勢守貞親を以て將軍へ詫びを入れ、歸參を許可されたので、康正元年四月に上洛した。所が増澤、二宮、千福等は之を怪しみ、途中に義敏を要撃した。此の報一たび將軍に達するや、義政激怒し、敏景に勅書を下して、奸臣の誅戮を命じた。是に於て敏景は、

寛正元年以來各處に轉戦して、是等を討伐し、大に戰功を建てたので、文明三年、越前の國を賜り、足羽郡一乗山へ城を築くことを許された。故に敏景は朝倉氏の越前國主初代である。

此の敏景は、一面佛教信者で、坂井郡の吉崎山を本願寺蓮如に寄進した。世人は一般に、越前に淨土真宗の流布したのを、蓮如一人の高徳と辯舌に歸して居るけれど、若し此の國主敏景の外護の實力が無かつたならば、決して蓮如は、一日も安閑として説教は出來なかつたのである。加越の一向一揆の宗徒や、平泉寺、豊原寺の僧兵が、漫りに吉崎へ手出しの出来なかつたのは、實に敏景の戰闘力が、蓮如の背後に控へて居たからである。

斯くて敏景は文明十三年七月二十六日を以て逝去す、法名を一乘寺殿英林宗雄大居士と曰ふ、心月寺に葬る。

### 二 敏景と斯波氏の關係

茲に敏景の主人斯波氏の畧系と、「野史」に載する所の義敏、義康の略傳を掲げて、その研究資料に充つ。

### 斯波氏略系



義敏 義康 義良

## 〔斯波義敏〕

「斯波義敏、大野義敏の子、修理大夫斯波持種入道道顯養て子とす、享徳元年斯波義健卒して嗣なし、將軍義政の命に因て其の嗣となり、左兵衛佐に任せらる。斯波氏の宿臣甲斐、朝倉、織田の徒、意之を欲せず、遂に其舊封を掠奪す、尾張は織田氏に屬し、越前は朝倉氏に屬し、遠江は甲斐氏に屬せり。而れども義敏制馴する能はず、遂に居第を避け、東山東光寺に逃れ、幕府に愁訴して此の三氏を驅除せんことを請ふ、義政猶豫決せず、長祿三年二月、三人の徒、伊勢貞親に就き、義敏昏蒙にして家職に堪へずと訴へ除籍を請ふ。義政慰諭すれども背ぜず、遂に義敏をして致仕し、子松王丸を立てゝ之と和解せしむ。既にして義政、貞親の請ふ所を聽き、瀧川義廣を以て故の義健の子に擬して家督とならしむ。義敏失望怨恨して周防に走り、大内教弘に憑る、會々義敏の室家の姉妹、伊勢貞親の妾となる、妾、義敏の爲に屢々貞親に請ひて京師に復歸せしむ、貞親之を領き、相約して義敏の子松王丸を以て蔭涼軒真蘂の弟子となす、故を以て眞蘂、貞親と爲に懇請して止まず、義政遂に之を許す、六年十二月、義敏京都に歸りて義政及び貞親に見ゆ、文正元年六月、貞親、眞蘂屢々義敏をして家督となし、義廉の營參を止め、且其の居第を收む、義廉從はず、山名宗全は義廉の外舅たり、是に至り大に恚りて、義廉と共に兵を都下に聚め流言すらく、貞親も亦義廉に黨すと、京師騒然たり、貞親、眞蘂趾を晦まし、義敏北國に奔る、九月義敏、宗全等と媾和し、義廉をして家督を復せしむ、應仁元年細川勝元、山名宗全と相抗するや、義敏兵を率ゐて勝元に黨す、文明四年十二月、從五位下に叙し、治部大輔に任せらる、七年十二月、尾張に遁く、斯の國や斯波氏累世の封地たり、而れども統下織田氏久しく守護代となり、舉州服從するを以て、義敏國に在るも殆んど無きが如し、十年七月、從四位下に叙せらる、

延徳二年正月、越前大野に卒す、年六十一】

## 〔斯波義廉〕

「斯波義廉、左兵衛佐瀧川義紀の子、享徳元年義健卒して、義敏家督を繼ぐ、甲斐、朝倉、織田の徒、意之を欲せず、伊勢貞親と云ふ者、義廉と姻好あるを以て、之をして斯波氏の後を繼がしめんと欲す、長祿三年二月、將軍足利義政遂に義敏を黜け、義廉を以て義健の子に擬し、治部大輔に任じて家督を領せしむ、義敏北國に奔る、文正元年六月、義政斯波氏の家督を以て復し、義敏に聽るす、八月義政命じて義廉の營參を罷め、且居第を避けて義敏に譲らしむ、義敏肯ぜず、義廉は山名宗全の女婿たり、宗全大に忿り、義廉と相議し、兵を聚めて黨を樹つ、京師爲に騒然たり、義敏、貞親等奔走す、九月義政、義廉をして家督を領せしむること故の如し、應仁元年正月、義敏室町の管領となる、宗全、細川勝元と相抗するや、義廉兵を卒ゐて宗全に黨す、義廉累世の任を以て、畠山政長に代りて重職に補せらると雖、府下の權勢悉く宗全に歸す、五月左兵衛佐に任す、文明五年宗全、勝元相繼いで歿し、其の黨猶抗衡す、九年十一月、各々罷めて國に就く、義廉又歸りて清須城に居る、（一説に云ふ、文明二年義廉西陣に卒すと）義廉晝を好み、山水を巧みにす、子義良、左兵衛督に任せられ、文明十二年、相伴衆に列す。」

## 三 敏景、吉崎山を蓮如に寄進す

本願寺蓮如が北陸へ巡教したのは、寶徳元年、齡三十五の時、祖師觀鸞の舊跡參拜として、越前、加賀、越後へ來たことがある、然し敏景と蓮如が對面したのは、文明三年五月、加賀の篠原動振橋より越前國足羽庄に來り、夫より三國港へも出た、日夜説教毎に道俗男女が群集繁昌するので、蓮如は非常に喜び、加越兩國は衆生機縁の地であるか

ら、一寺を建立したしと思ひ、國內を巡化する内、坂北郡細呂木郷の内、吉崎山へ登り、山紫水明の風光に杖を停めて居たが、是ぞ伽籬創建の地相なりとトし、之を越前國主朝倉敏景に乞ひて、その寄進を受け、七月吉崎御坊を建立し、その二十七日に開闢したが、同時に和田の本覺寺、田島の興宗寺、桂島の照護寺、荒川の興行寺、藤島の超勝寺、横根の乘願寺、川島の尊勝寺等も、その附邊に四十八宇の塔頭を造營し、本山守護と稱した、又越前、加賀、越中の門徒も、我劣らじと多屋を建て連ねたので、二百棟の臺は、鱗次櫛比するに至つた、馬場大路、南北の大門、宛然大國の城廓の如しといふ盛況である、四年秋冬の頃より、平泉寺、豊原寺の衆徒之を嫉視し、又當時越前國の過半を占めた真宗山門徒や、高田派の異流も、此の意外の本願寺一派の蠶食的興隆に狼狽し、密に吉崎破却を企てたるも、國主敏景の威勢を恐れて、事を發するに至らない、一方加賀國主富樫次郎政親は高田派の門徒たる理由を以て、その力を借らんと、僧徒の運動猛烈を極めたけれど、政親も亦加越兩國の騒動を慮りて、頑として同意しない、此の如く、吉崎破却の風聞が頻りに聞えるので蓮如は、翌五年正月、諸人の吉崎出入を停止した、一旦は加越兩國とも、靜謐になつたが、門徒は禁を冒して、益々參詣した、同年三月、諸寺諸山、又々吉崎破却の問題を再燃したので、之を敏景に訴へると、「若し浪人衆僧共本山を破却致さんとする者あれば、當方より軍勢を急派すべし」との返答があつた、八月十五日、加賀國安樂寺の覺力坊、兵二千餘騎を率ゐ、吉崎を破却せんとて攻來る首途に、本願寺末派の河島超勝寺を燒拂つたが、富樫の家臣山田五郎左衛門の嚴命に依り、退散の止なきに至つた、是に於て蓮如は一時藤島の超勝寺に避難したが、敏景より舍弟朝倉恒景を以て、吉崎歸住を勧誘して止まないので、蓮如は九月六日、吉崎へ歸住した、然るに六年三月十四日酉の刻、南大門本覺寺の納家より出火して、見るゝ火勢は一山を灰燼に歸した、彼の有名なる本向房了顯が、火中に身を躍らし、蓮如の置き忘れたる親鸞自筆の教行信證の一軸を探り、之を腹中に藏めて取出し、黒焦となつて死んだのは實に此の時であつた、今尙本願寺第一の寶物、「本向房腹籠の御聖教」と稱し

て居るのは、即ち是である、五月上旬、吉崎假御堂が建立されたので、蓮如は此の間加越兩國を巡教した、七年三月上旬敏景は使者を以て「御堂を一乗谷へ再建せられては如何」と申送つたが、蓮如は「加越門徒參詣人不便なれば」との理由で謝つた、然らばとありて、愈々七月下旬より吉崎へ、御堂を再興することとなつたので、蓮如の家來下間法眼安藝が、材木を求むる爲に大野大山城主朝倉經景の城に宿した、經景は敏景の弟である、秋の夜長を消さんとて兩人は鳥鷺の戦を始めたが、勝敗に就きて争論起り、その夜、安藝は大野を去つて、翌曉足羽郡市波村（今の下宇坂村大字）の超勝寺に至る。一方經景は平泉寺の衆徒へ之を通報し、同勢二千餘騎を以て、九月三日、超勝寺を圍んだが、既に安藝は加賀へ落ちた後だつたので、直に吉崎へ押寄せた。蓮如は間一髪、吉崎山を逃出し、船に乗りて鹽屋浦より小鹽浦へ出で、翌曉、文政七年九月四日、越前を出帆して若狭國小濱へ避難した。

要するに蓮如が前後五ヶ年間越前に滞在し、加越の門徒を化導することが出來たのは、偏に敏景外護の恩に倚るのである。

### 第三項 氏 景

朝倉氏景、幼名は孫次郎、孫右衛門尉と稱す、一乘城主初代朝倉敏景の嫡男で、敦賀郡司金崎城主朝倉金吾教景はその末弟である、長祿三年四月五日を以て生る。人と爲り智謀抜羣にして、體格も亦長大、故に文明三年六月九日、將軍足利義政より劍を賜ひ、北陸道討伐の命を受け、謀反餘黨を滅亡し、屢次感狀を授與された、驍勇天下に鳴つたが、十八年七月三日、年僅に二十八歳を以て逝く、法名を子春宗孝大居士と曰ふ。

### 第四項 貞 景

朝倉貞景、幼名は孫次郎、彈正左衛門尉と稱す。一乘城主第二世朝倉氏景の嫡男である。文明五年二月五日を以て生る。貞景の叔父孫五郎景総は、弟小太郎教景（越前人物志に重  
景とあるは誤記）が本腹で、特に父教景より鍾愛せらるゝを好み、十五年七月十三日夜、小太郎を討ちて南條郡宅良村の慈眼寺に遁世す。所が小太郎の母が非常に立腹したので、景総は之を恐れて京都に走り、細川政元に仕へて彈正忠元景と改名し、大に威勢を張つて居た。長享元年九月十二日、將軍足利義尚、近江の佐々木六角高頼を攻む。將軍使を馳せて救を貞景に求めたので、貞景は自ら兵數萬に將として近江に進發し、所々に放火して突撃す。高頼驚愕、甲賀山に遁竄す。爲に將軍より大にその軍功を賞せられた。明應二年十月二十一日、貞景は加賀の一一向一揆を坂井郡豊原寺邊に掃蕩す。文亀三年四月、元景謀反を企つ。即ち元景の甥は敦賀郡司朝倉景豊であり、景豊の父遠江守景冬の甥は鳥羽在馬助、勝蓮華太郎、堀江景用、朝倉金吾教景の四人であつたが、金吾教景を除く一族協力して、宗家の貞景を殲すべく計劃を廻した。當時坂井郡八幡村　今之本郷村大字龍興寺に遁世して居た金吾教景は、此の陰謀を探知するや大に驚き、同月二日、馳せて一乗谷に赴き、夜中貞景に面謁して、之を急報したので、貞景は迅雷疾風的に命令一下、忽ち數千騎を非常動員し、翌日出馬、金崎城を包囲した。城將景豊、その不意討に狼狽爲す所を知らず。遂に自殺したので、城も亦陥落した。時に元景は近江國南部に出陣して居たが、景豊を應援すべく、船を琵琶湖上に急航したけれど、風濤の爲に阻まれ、金崎落城の翌日、漸く湖岸へ到着した。是に於て越前入國の方針を一變し、近江國より飛驒越をして加賀へ迂廻し、斯波武衛義將の家臣増澤甲斐、二宮左近將監等の末葉を召集して、同勢壹萬八千人を得たので、永正元年八月六日、越前國坂井郡坪江上郷へ出陣す。貞景之を聞きて憤慨し、直に同郡長崎村（今之高椋村大字）に兵を進めて勇戦した。九月十九日、貞景、金吾教景を派遣して之を追撃せしむ。是に於て元景は能登に出奔し、翌二年死亡してしまつた。貞景は金吾教景の忠勇無比を激賞し、遂に敦賀郡司に抜擢し、金崎城に據らしむ。

是より先き、永正元年越前、加賀に一向一揆起る、その故は本願寺、専修寺の兩派、本末を論争して止まぬので、京都に居つた加賀國主富樫政親は、十二月十四日勿々歸國す。是れ實に運如が吉崎山を開闢してより三十四年目の宗論である。政親は之が論訴を聞き、宗義の眞理は同一なりと裁斷して、本末論を解消する措置に出でず、自身が高田派の信奉者であつた關係上、専修寺派の勝訴に歸したので、此の我田引水的判決に對し、本願寺宗徒の激昂を買ひ、二年六月九日、石川郡の高尾城を攻囲せられ、政親も亦自裁するの拙策に終つた。一方越前の堀江中務景用は、朝倉光政の意を受けて、坂井郡佐野村（今之鶴村大字）吉田郡志比（今之志比谷村大字）等の兵三千餘騎を率ゐて、加賀國江沼郡に入り、政親に加勢せんとせしも、政親の生害を聞き、將に歸國せんとした時、江沼郡に五千餘騎の一揆蜂起したるを以て之に應戦し、互に一勝一敗した。然るに一揆は益々加勢を得て大軍と爲り、三年七月十七日、越前へ攻め寄せ、九頭龍川の北へ放火して、坂井郡兵庫村及び長崎村（今之高椋村の大字）に著陣した。時に敦賀郡司金吾教景は、越前國內に於ける一向一揆の首魁を縛して一乘谷へ來たので、貞景は金吾教景を以て、加越一揆討伐の總大將に任命した。

五千餘騎	吉田郡藤島へ出陣	朝倉金吾教景
三千八百餘騎	同郡志比河畔へ出陣	朝倉景駿
四千六百餘騎	九頭龍河畔へ出陣	勝蓮華右京進
三千餘騎	坂井郡黒丸へ出陣	山崎小太郎
計	壹萬六千四百餘騎	

朝倉軍は此の寡兵を以て、加越兩國の一揆十萬餘騎と奮戦したが、遂に之を撃退したので、貞景自身出馬、金吾教景に感狀を授く。十月十日、一揆は豈原寺を加勢として、川北方面を進退せんとし、又大軍を率ゐて押寄せたので、

北庄城主朝倉景行は坂井郡中川村（今の中川村）の帝釋口に於て激戦し、一揆參百餘人の首級を擧ぐ。斯くて九年三月二十五日、貞景は鷹野の途中に於て病死した。年未だ四十歳、法名を長陽院殿天澤宗清大居士と曰ひ、一乘谷心月寺に葬る。嫡子孝景、當時齡僅に二十歳の青年なりしも、追孝の志厚く、亡父の菩提を弔ふべく、その先考貞景病歿の遺跡に一字を創建し、法名に因みて天澤寺と稱す。

## 第五項 孝景

朝倉孝景、幼名は孫次郎、左京大夫、彈正左衛門尉と稱す。一乘城主三世朝倉貞景の嫡男で、明應二年十一月二十二日を以て生る。永正十年三月十八日、近江の淺井亮政、上坂泰舜を逐ひて小谷城に據つた時は、京極高岑、六角定頼の兩人が力を戮せて亮政を攻撃したので、亮政は救を越前の朝倉氏に乞ふた。孝景は後見役朝倉令吉教景の議を容れ、亮政を應援して定頼を擊破した。爾來朝倉、淺井兩氏は、水魚も皆ならぬ親密の關係となつた。十三年六月五日、將軍足利義稙より、白傘袋、並に氈鞍覆を許さる。大永元年、定頼は齋藤氏の援を得て、再び亮政を攻めたが、此の時も亦孝景が之を應援して、定頼を擊退した。六年四月、後柏原天皇崩じたまひしを以て、後奈良天皇踐祚せらる。七年十一月十九日、兩細川氏の争つた時は、金吾教景を遣はして高國を助け、大に細川晴元、畠山義英と戰つた。享祿三年八月十七日、大阪の本願寺證如、兵を率ゐて加賀に入り、山田黒瀬の僧と戰ふ。是に於て四年八月十九日、孝景は先陣として堀江景忠を派遣し、二十二日教景、景紀父子を總大將として、八千餘騎を以て之を邀撃せしむ。本件は孝景の嫡子義景の代に至り、漸く本願寺と和解が成立したのである。五年五月二十五日、將軍足利義晴、特に孝景を御相伴衆に列し、名刀鬼伐を賜ふ。天文四年正月、義に後奈良天皇は踐祚したまひしも、皇室式微にして、即位の大禮を舉行すること能はずと聞くや、直に壹萬疋を獻上して御嘉納の光榮に浴した。當時に在りては、實に珍

らしき勤王報國の精神を發揮したものである。四月二十二日には塗興を許された。孝景は信仰心深く、祖々父敏景の爲に英林寺、祖父氏景の爲に子春寺、父貞景の爲に天澤寺及び遊樂寺を創建し、法雲堂と號する經堂を建立して、五千餘卷の經典を寶藏せしめ、その他炎上したる弘祥寺、心月寺を再興したが、十七年三月二十二日、足羽郡の波着寺へ參詣して下向の際、途中に於て頓死した。年五十六、法名を性安寺殿大輔宗淳大居士と曰ふ。大正四年十一月十日、正四位を追贈せらる。

## 第六項 義景

### 一 略傳

朝倉義景は越前國主としての朝倉氏の最後であり、本書主要の人物であるから、茲に詳説するつもりであるが、取り敢へず「野史」の異傳を引用して、その概念を握ることゝしやう。

「朝倉義景は越前の領主、世々一乗谷に居る。彈正左衛門孝景の子、孫二郎と稱す。初名は延景、天文二十一年六月、將軍義輝の字を賜ひ、左衛門督に任す。永祿二年十二月、義景從四位下に叙す。五年八月、大覺寺の門主義俊越前に来る。義景爲に曲水の宴を設く、皆以て亂世の一興となす。之より先き、加越の土賊越前の一向徒と謀を合せ、嘴集亂を作す。義景兵を遣はして之を伐ち、賊と約して手取川を境となし、以て半州の租税を收めしむ。尋て將軍義輝の命を受け、之と和して女を本願寺教如に娶はす。悉く加賀の地を以て本願寺に附す。之を暫くして加賀の賊、盟約に背き、本願寺の貢米を抑留し、又郡邑を侵し、行旅の資財を奪ふ。是に於て義景人を遣はし、賊を諭さしむ。賊より謝す。九月二十日夜、又急に來り、月津御幸塚を襲ふ。勝蓮華景基等、力め禦ぎ之を破る。賊酋坪坂伯耆、力盡きて來り降る。是に於て義景の兵威大に振ひ、近江以北盡く服す。九年九月、足利義昭來りて義景に投す、義景親族

群臣と謀りて、其の恢復の計を議す。會々義景の長子阿若（阿君丸）死す。義景之を悲み、稍々武事を怠る。義昭去て美濃に行く。義景文を好み、和歌を詠す。嘗て細川氏の女を娶る。卒す。近衛氏の女を迎ふ。又小宰相を愛し、近衛氏を送り歸す。又齋藤兵部少輔の女を納る。少將と名く。一男を生む。之を愛王と名く、家政漸く衰へ、婦女口を出す。又老臣相尋で歿し、謫間大に行はれ、賞罰當らず。十一年九月、織田信長、義昭を擁して京都に入る。畿甸の諸侯皆服従す。獨義景疑て行かず。元龜元年信長、家康と兵十萬を帥る數貿に到る。金ヶ崎、手筒山の諸城遂に陥る。信長猶ほ進で一乗谷を攻んたす。淺井長政、義景と謀を通じて、信長の歸路を斷つ、義景兵を出して之を追ふ。信長夜に乘じて京都に奔る。六月信長、長政を攻む、義景、放景健を遣して之を救はしむ。二十八日景健、家康と姉川に戦ひ大に敗れ、僅に免れて歸る。九月信長、兵を攝津に用ふ。長政義景と合し、其の虛を伐たんとす。一向の宗徒亦義景等を助けて信長の歸路を遮ぎる。信長兵を還して京都に入る。十一月彼我勢屈し、且北地雪深きを患ひ、義景等義昭に囚りて信長と和す。三年七月信長、虎御前山に城く。義景人を遣りて小谷を援け、自ら兵三萬餘を率ゐて梁ヶ瀬に陣す。此に於て和また破る。天正元年七月、信長兵を率ゐて虎御前山に陣す。八月長政の將叛く者あり、長政援を義景に乞ふ。義景兵を出して之を救ふ。十月信長、大獄、下野を攻め降す、義景の兵敗を聞き、稍々脱し去る。義景狼狽、甲を棄てゝ走る、信長の將佐々成政、前田利家等追ひ至る。義景の兵、死傷頗る多し、十五日義景、僅に數騎を從へて一乗谷に歸る。信長勝に乘じ、連りに諸城を降し、敦賀に入る。義景の族景胤、景健等皆信長に降る。義景、朝倉景鏡、島居景近等と謀りて、創廣德院及び愛王を亥山東雲寺洞雲寺の誤記に匿し、書を平泉寺の僧徒に送りて救を乞ふ。僧徒従はず。十八日信長、府中龍門寺に入る。僧徒火を一乗谷に續つ。朝倉氏累世の貨物悉く灰燼となる。景鏡素より反心あり、乃ち義景を勧め、母子と山田六坊に徙らしむ。從者僅に八人、景鏡兵二百を率ゐ、急に六坊賢松寺を圍みて之を焼き、人を遁はし、義景に謂て曰く、運命既に盡く、乞ふ、自ら計をなせと、義景怒て曰く、姦豎憎むる。實に義景死後數月を出です』

## 二 義景の加賀征伐と本願寺の和睦

朝倉義景は天文貳年九月二十四日を以て生る。十七年三月二十二日、朝倉孝景卒去するや、延景襲封して越前國主第五代とある。將軍足利義輝延景を拔擢して御相伴衆に列し、諱字を賜ひて延景を義景と改名せしむ。朝倉金吾教景武略あり、弘治元年義景に謂つて曰く、「近年加賀の土民等本願寺を誣らひ、武士の國を押領して恣に逆威を振ふは未曾有の暴舉である。是れ實に佛法の怨敵のみならず。加賀は父祖歷代の敵國であるから、此の際宜しく之を討伐せよ」と、時に同年の春、越後國主長尾彈正少輔景虎、密に使者を以て、「先年加賀、越中の一揆蜂起の時、我父爲景虎は越中に出陣して戰死したるも、景虎幼少にして如何ともすることが出來なかつた。然るに今又兩國専横を極むるから、父の仇を報ひたい。顧くは合力して加賀の一揆を退治せられよ」と申込んだ。是に於て義景は金吾教景の勧誘と、景虎の懃情に動かされ、直に教景及びその孫景頃を大將と爲し、七月二十一日、壹萬壹千三百餘騎、威風堂々として、一乘城を進發した。二十三日加賀國江沼郡に於て津葉、南郷、千嶋の三城を抜く、八月十三日本願寺證如の忌日を卜して、敵將超勝寺の軍勢二萬餘騎を濱手山に攻め、更に敵將本覺寺等の軍勢五萬餘騎を敷地山に破つた。此の日敵の首を擧げたるもの實に六百八十餘級と稱す。即ち戰捷を景虎に報じた。同月二十日晚より七十九歳の老將金吾

教景發病したるにより、義景之を憚み、朝倉景高父子をして之に代らしめたが、金吾教景は一乗谷に歸陣し、九月八日終に逝去した。是に於て同月下旬、景高は朝倉軍の大將として、又加賀へ進軍し、十月安宅城の背後を衝き、又大に敵を破る。弘治二年の春、將軍足利義輝、大館晴光を一乗城に遣し、加越兩國の和睦を勧誘したけれど、義景が應じない。即ち二月再び武田信賢を以て教書を送つたので、遂に朝倉氏と本願寺と和睦したから、四月二十一日、景高は諸軍を率ゐて凱旋した。

### 三 足利義昭の越前下向

永祿貳年十二月、義景從四位下に叙せらる。四年三月四日、坂井郡本郷龍興寺に一宿し、五日糸崎寺に參詣して和歌を詠す。

西の海入日の色も紅に寄來る波や糸崎の浦  
同行の祐筆櫻井本秀之に和し、漢詩を賦した。

西海悠々夕照紅 險崖龜島宿<sub>ニ鷗鴻</sub> 漁舟亂倚<sub>ニ絲崎浦</sub> 桃<sub>ニ得</sub>龍燈<sub>ニ對</sub>玉宮<sub>ニ</sub>

此の夜旅房に宿す。當地に二三日滯在の後、三國港の性悔寺に參詣して、

歸るらん幾浦々の海士小舟篠谷山の入逢の鐘

今も聞く篠谷山の鐘の聲假の浮世の夢は何時迄

これは義景が人生の無常を感じての作で、一讀人をして生者必滅の感を生ぜしむ。又瀧谷寺、東尋坊、雄島大明神を巡覽し、濱坂浦の潮超の松を見て又一首あり、

習あらば間はましものと浦の松千年の後を幾代經るやと

十日北潟を経て一乗城に歸る。四月六日には坂南郡棗鄉に於て犬追物を見る。又翌五年八月上旬には、越前へ下向の大覺寺義俊の爲に、阿波賀河原に於て曲水の宴を開いた。

九年九月晦、足利義秋は義景に倚頼すべく先づ越前國敦賀に下向す。その故は前に將軍義晴に三人の子があつた。長男は前年京都の館に於て、三好長慶の爲に殺害された前將軍義輝、次男は奈良の一乘院に入つて得度した覺慶、即ち義秋、三男は北山の鹿苑院にて剃髪した周嵩である。此の義輝時代より足利氏の勢力は漸く衰退し、反対に武士が揃頭して來た。越後の長尾景虎は、既に永祿二年六月、關東管領職兼御相伴衆となり、元細川氏の郎黨たりし阿波の三好修理太夫長慶も、御相伴衆に任じて、猛威を次第に五畿内に波及し、微賤無名の松永彈正は一躍して大和、山城兩國の守護職に出世し、城を奈良の多門山に築きて、奈良、京都の成敗を司つた。所が長慶が老衰し、その子息筑前守義長も毒害早世したので、彈正は十河民部大輔長正入道一存の次男を長慶の養子に世話し、之を右京大夫義繼と號せしめ、此の三好氏の勢力も併呑したので、京都の進退は、殆ど彈正の一人舞臺となつた。是に於て彈正は心益々傲り、永祿八年五月十九日夜半、一千騎を以て義輝を室町幕府に襲ひ、一方鹿苑院へは平田和泉を差向け、共に之を弑害したので、奈良の一乘院に居つた覺慶は大に驚き、兩兄の復讐を爲すべく、還俗して義秋と改名し、爾來近江の和田和泉守秀盛、佐々木入道承禎及び若狭國守護職武田大膳大夫義統等に、三好征伐を倚頼したけれど、力及ばず。九年遂に義景に保護を懇請して、その承諾を得たので。九月晦日、若狭より敦賀へ到着したのである。然るに敦賀滞在中大雪に遭遇して、一乗谷に行くことが出来ぬので、遂に同地にて越冬した。

### 四 堀江父子の冤罪

翌永祿十年三月、義秋、敦賀より一乗谷へ赴かんとす。偶々堀江景忠、利茂、父子が加賀の一向一揆を誘ひて謀反

するとの風聞が起きたので、義景は大に怒り、同月十八日、魚住備後守義固、山崎長門守吉象を兩大將に任じ、二千餘騎を坂井郡金津の溝江河内入道景逸の館へ差向けて了。これは、朝倉式部大輔景鏡が、景忠の勢力増大を妬みて、義景に讒言したる結果で、景忠父子は謀反心など、毛頭抱いて居らなかつたのである。即ち景忠父子に取つては、意想外の珍事であつたが、止むを得ず。一千餘騎を非常召集して應戦した。然し景忠は智勇兼備の大將だから、決戦は容易のことではない。そこで小和田の本流院眞孝が姻戚を按すると、

武田中務大輔次女  
長女 朝倉義景母  
武田中務大輔次女  
三女 堀江中務亟室  
本流院眞孝室

の關係となり、外に景忠の息女は本流院二代、即ち眞孝長男の室となれる近戚間に在るので、双方を和睦せしめんとの志を起し、武田中務大輔を誘ひて一乗谷へ馳付け、義景の母と共に堀江父子の冤罪あんざいを訴へ、聲涙共に下つた。是に於て義景の疑闇も冰釋したので、義景より和議の判物を受け、溝江館滯陣の魚住山崎兩大將に之を傳達すると共に、堀江の館へも報知し、且他國へ避難を勧誘した。堀江父子は無實の罪に問はれて、越前を退去するは遺憾千萬なりと、一時は切歎扼腕したけれど、遂に不運とあきらめ、同月二十日、加賀を経て能登へ退散したので、世人は堀江父子に對し、大に同情して止まなかつた。

## 五 關白二條晴良、義景に投す

永祿十年十月二十一日、義秋は敦賀を出發し、途中府中の龍門寺に宿し、翌日一乗谷の安養寺に到着した、二十三日、義景謁す、二十五日、義秋、義景を訪ぶ。十一年三月八日、義秋、特に義景の母を一位の尼に任す、尼は武田中門を召出し、九尺五寸の大太刀を、下僕八人に擔出させ、之を打振ひて、一座の脛を寒からしめたことが、「朝倉始末記」に叙述してある。四月下旬、關白二條晴良も亦見廻みまはりと稱して密に越前に下向し、一乗谷に來た。義秋が義昭と改名したのは、實に此の月である。是に於て五月十七日義景は、義昭、晴良兩公を朝倉館に招請して御能を供覽す。六月二十一日、義昭は特に義景を召して、「近頃京都から毒薬が下つた山だから、お互大小となく用心しやう」と約束した。

## 六 義景の心境一變、信長の系統

永祿十一年六月二十五日、義景の嫡子阿君丸頃死す。是は乳は福岡氏が毒害された時、その乳を呑ませた爲であると、専ら風聞された。是に於て義景は天にも地にも唯一人の掌中の珠にも比すべき、齡僅に七歳の愛兒を失ひたることとて、悽然自失す。爾來心境一變し、國政を放棄するかの觀があつた。乳母毒殺の原因は、福岡氏の乳涸かわれて出でざる時は、おさしと稱せし女房の乳を與へたるに、阿君丸の機嫌きげん頗る能く、且日毎に健全になり行くを見て、おさし遂に福岡氏を毒殺して、その乳母に代らんとしたる結果であつた。洵に寸善尺魔の舉とは此のことである。はるばる義景に投じた義昭も、今此の義景の不幸と、その政治を放任主義に急變したる態度に、依頼心を放棄するの止むなきに至り、尾張の織田信長の力を藉りて上洛すべく、永岡兵部大輔藤孝、上野中務大輔満信の兩使を以て合一方を信長に懇請せしめた。

抑も此の織田信長は今の越前國丹生郡織田鎮座國幣小社劍神社神主織田三郎權太夫親眞の子孫である。

### 織田氏略系

○高魂命—天太玉命—親澄—親眞—親基—親行—基實—常昌—常勝—教廣—常任—勝久—久長—敏定—信定—

信秀—信長—信雄—信良—信昌—信久—信就—信右—信富—信邦—信浮—信美—信學—信敏（明治十七年七月八日授予爵）

信恒（子爵當主）

親眞の母は富田二郎平基度の女である。親眞は貞永二年織田明神の神主となり、正嘉二年出家して法名を覺性と稱したが、正元二年二月十八日を以て逝去した。古來親眞を平資盛の庶子であると、「信長記」、「總見記」、「總見院殿追善記」、「織田家譜」、「大日本史平重盛傳」、「日本外史」、「勢州四家記」、「伊勢國司傳記」、「桓武平氏系圖」、「野史」、「茶人系傳全集」、「日本歴史之裏面」等に書き立てゝ居るのは、全然誤記である。親眞は資盛の庶子でなく、神祇權大祐正六位下で、織田明神神主に兼補せられし織田親澄を父として生れた嫡子であつた。史を按するに、足利氏天下を定むるに及び、斯波高經は越前、尾張、遠江三國の管領職となつた。高經はその孫義重をして尾張、遠江の兩國を管せしめたが、或時義重は越前に來りて、丹生郡の織田に遊び、親眞五世の孫常昌の容姿端麗なるを見て心動き、遂にその父織田の莊地頭職織田三郎右衛門尉基實に乞ふて、北莊に連行し、その近臣の列に加へた。義重には從來六家老があつたが、會々其の一人が罪を犯して追放したので、義重は寵臣常昌を拔擢して之を補充し、且筆頭に任じて北莊城に居住せしめた。後ち尾張に招き寄せたので、爾後常昌の子孫は斯波氏の長老として重用された。武家を再興した信長は、實に常昌十世の孫である。常昌の後は織田帶刀左衛門尉常勝、次郎左衛門尉教廣、清洲城主大和守常任、

彈正右衛門尉勝久、犬山城主近江守久長、岩倉城主伊勢守敏定、勝幡城主彈正忠信定、古渡城主備後守信秀、信長（右大臣兼右近衛大將正二位）と繼承したものである。且此の織田氏は欽明天皇より忌部姓を賜はつた豊止美の血統で、家紋は木瓜を用ひて居るが、平氏ならば家紋は上羽蝶の筈である。今も尙信長の正系者子爵織田氏も、織田劍神社も、同神職も、皆木瓜の紋章を使用して居るのに従しても、信長は平氏に非ずして忌部氏の系統者たるを證することが出来やう。大正二年九月、京都帝國大學教授文學博士故内藤虎次郎氏が、織田信長の祖先を調査すべく、態々著者秋甫（當時二十八歳）を來訪せられたことがあるが、「このことは既に同元年九月、福井縣丹生郡人物誌を著述出版して、その中に史論を發表して置いた」ので、之を贈呈した所、積年の疑問、一時に雲消霧散せりと打喜ばれ、夫れより當時未だ縣社たりし織田劍神社に參拜して歸洛せられたが、爾來信長の祖先に關しては、博士は著者の學說を支持されたものである。右の如く、信長の祖先は越前人であつた。然し信長其の人は、義景に取つては大敵であつたのである。た。義昭は途中より義景に使者を遣はし、

今度當國退坐之處、忠義思召候、向後身上不可見放候、大藏卿可申述候也。

七月二十日

朝倉左衛門督どのへ

義昭（花押）

といふ禮狀を贈つた。

禮つて義景の夫人を一瞥して見やう。

第一 細川右京亮女 女子一人を生む、早世。

第二 近衛卿女 容色無變なるも出生兒なき爲め、後ち離別して歸洛せしむ。

第三 鞍谷刑部少輔女 小宰相局と稱す。一女早世。二女東本願寺教如室。嫡男阿君丸七歳にて夭折、法名玉芳宗珍。但此の夫人鞍谷氏は、永祿十二年三月下旬病死した。

第四 齋藤兵部少輔女 小少將と稱す。愛王丸を生む。義景の自刃したる七日目、即ち天正元年八月二十六日、

信長の爲に殺害せらる。時に齡僅に四歳、法名華林宗春。又一女を生む。比丘尼となり、法名を宗榮茲

春と曰ふ。天正元年八月、朝倉氏滅亡後、今立郡長泉寺の攝生寺に逃れた。

此の第四番目の夫人齋藤氏、紅顏翠黛、是れ又一代の美人であつたが、特に好言令色の才能があつたので、大に義景の氣に入つた。之が爲め追々增長し、部下女房連中の能辯家小太夫、式部卿、宮内卿と共に、義景出座の評定、國中の公事沙汰に至るまで嘴を入れるやうになつた。所謂女子さかしうして、牛を賣りそこねたる結果を生じ、茲に國政混亂、朝倉氏衰退の原因を孕んだことは、返すゝも遺憾千萬であつた。

### 八 義景、信長の上洛招請に應ぜず

永祿十一年九月中旬、尾張の織田彈正忠信長は、足利義昭の三好長慶征討に從軍して上洛し、五畿内を平定し、威を近國に振ふたので、諸國の武士を京都に召集した。義景にも上洛の教書が來たので、一族老臣の會議を開くと、朝倉土佐守景行ツト一膝進み出で、

越前全國

加賀半國

近江 北は姉川を境し、西は衣川に至るまでを管轄す。

若狭 是は朝倉氏ではないが、朝倉氏麾下の武田大膳太夫義統が支配し居たので、朝倉氏の勢力圈内

に在つたも同然であつた。

右の通りであつたから、義景始め朝倉氏一門は、自然心傲り、尊大の氣風があつたので、一も二もなく景行の説に賛成し、天下無雙の武力を以て自任した。

是に於て義景と信長は、一戦無かるべからざる境遇に置かれたのである。

### 九、義景、敦賀と姉川に信長を破る

元龜元年四月二十五日、いよいよ信長の朝倉義景征伐の釁端は開かれた。

敦賀郡 手筒山城 城將寺田采女正 既に陥落

同郡 金ヶ崎城 城將朝倉中務大輔景恒 開戦最中

との飛報、一乗谷城に達するや、義景は「一日も敵兵を仕國に指置くな」とて、直に軍勢の配備に着手した。